

Dr. Stanley Grenz

"Christian Spirituality and the Quest for Identity: Toward a Spiritual-Theological Understanding of Life in Christ"

に対するレスポンス<sup>1</sup>

内田和彦

### (1) 「靈性」がしばしば語られるようになった理由

ポスト近代の「靈性」に対する関心の高まりが、どのような歴史的文脈の中で生じて来たものか、Grenz は明らかにしている。その要点は、世界に対して中立的な観察者として立つ自律した近代的自我が幻想であるとされ、流動的で不安定でアイデンティティを失った自我が、新しいアイデンティティ、新しい自己を見出す必要から、「靈性」の追及へと向っているということにある。

それはその通りであると思われる。しかしながら、そのアイデンティティの探求が新しい自己、自我の探求ではなく、まさに「靈性」の追及と表現されているところに、近代と異なるポスト近代という時代の状況があると言えるのではないか。すなわち、徹底して合理主義的、自然主義的であった近代に対する反動から、ポスト近代は、非合理主義的であり、超自然というものを視野においていた営みがなされている。そのような中で理性に対峙するところの靈性が関心を集めていると言えるのではないか。

もうひとつ、靈性に対する最近の関心は、近代の、人間を分析し、分解し、様々な要素に解体する傾向に対して、人間をトータルにとらえよう

努力し直すポスト近代の傾向とも無縁ではないと思われる。「靈性」という言葉は、人間の物質的な部分に対する靈的な部分ということで用いられるが、同時に、人間のあらゆる構成要素を統合する原理として意味合いを帶びているように思われる。断片化ということは Grenz も語っているが、それに対抗して、人間がまさにその人自身であることを可能にするものとしての「靈性」が期待をこめて論じられるのではないか。

### (2) 集団の物語によって自己の探求に対する答えを得るということ

ポスト近代の「靈性」の追及が、しばしば自己の物語を語るという方法をとっていることを Grenz は明らかにしている。確かに 1990 年代から、ナラティヴ・セラピーなるものが登場し、自分が生れてきてから今までどのように生きてきたかを物語る自己物語 self-narrative が、自らが何者なのかを発見することに有効であると言われている。Grenz は、世俗の靈性の追及において、人が所属する集団がもっている物語の超越的ビジョンによって、人は自らの自我を越えたものを見出し、生の意味を見出すとし、それゆえに、教会という共同体の物語が、彼らの靈的探求に的確な答えを提供できると考えているのではないかと思われる。

ここで二つの疑問が生じる。ひとつは、現代人がアイデンティティを回復するために、帰属する集団の物語に自らの物語を重ね合わせるということが、そもそも出来るのだろうか、ということである。今日のアイデンティティの喪失は、まさに、自らをアイデンティファイすることのできる集団、共同体の喪失に他ならないように思われる。

もうひとつの疑問は、人々の靈的探求に教会が提供できるものを、「物語」という言葉で表現することが、果たして適切であろうかということである。教会が発信するメッセージを物語と表現することによって、ある種の心理的な癒し、解放を経験することで眞の回心とは言えない「疑似回心」に留まってしまう危険性はないだろうか。Grenz はクリスチヤンの語る物語のエッセンスを過去における失敗と、キリストを通して与えられる救いの恵みを受け入れること、という二点に要約しているが、罪の悔い改めということが抜け落ちてしまわないように気をつけなければならない。日本

<sup>1</sup> (編集者注) 本稿は、Stanley Grenz による東部部会における講演に対して、内田氏による応答の全文である。

の福音主義の教会においても聖書の使信が「物語」と表現されるのを耳にすることがあるが、物語を求める現代人に、罪の悔い改めを伴う回心をもたらすのではなく、心理的な解放をもたらす物語の提供で終ってしまうことを危惧する。

### (3) 自己／アイデンティティの喪失と罪の問題

Grenz の議論において十分に取り上げられていないと思われる最も重要な事柄は、人間の罪の問題である。現代の靈性の探求は、キリスト教神学のパースペクティブからすると、究極的には神の探求であると Grenz は語るが、「究極的には」という但し書きをつけるにしても、罪の現実を考慮すれば、誤解を招く語り方ではないか。その語り方は、アテネのギリシャ人に対して「あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう」と語ったパウロの姿勢に類似しているように見える。しかし、「知られない神」としてギリシャ人が拝んでいるものが、パウロが伝えようとしている神と同一のものでないことは、その後の話の展開で、特に「すべての人に悔い改めを命じておられます」と語り、神のさばきのあることを伝える結びの部分で、明らかにされている（使徒 17:22-31）。

自己の喪失、アイデンティティの喪失と混乱は、ポスト近代に固有の問題ではない。それは罪の結果生じた事態、罪のもたらした諸相のひとつに他ならない。エデンの園で罪を犯したアダムは、神の臨在を覚えたとき木の間に身を隠した。そのアダムに神が「あなたは、どこにいるのか」と語りかけられたのは、居場所を知らずに尋ねたということではなく、アダム自身が自らの罪の現実を認めて、神の前に出て来るよう促したものとして理解できる。それはまさしく真の自己を喪失したアダムに、それを回復するよう促す恵みの言葉であると思われる。このようなアダムの姿は罪の結果であり、罪がもたらした人間の悲惨な姿の一面である。従って、その回復のためには、罪が赦されて神との関係を回復することが必要である。人間の側でなすべきこととしては、罪を悔い改めに、十字架の贖罪によってもたらされた救いの恵みを信じ受け入れることである。

もし、罪=自己／アイデンティティの喪失としてしまうなら、先に述べ

たように回心が疑似回心に留まってしまい、神ご自身が与えようとしておられる真の靈性の回復は起こり得ない。

### (4) 福音主義的靈性に見られる個人主義的な傾向の問題性

Grenz が指摘するように、福音に対する個人的な応答を強調する福音主義者は、近代の個人主義の影響を受けやすく、そのために教会も「市民団体やカントリークラブのように任意に加入する組織」のように考える傾向にある。かつて日本文化の文脈において回心したキリスト者は、なおのことそのような個人主義的傾向に陥りやすかったのではないか。というのも、家、村、会社といった、自らが帰属する集団への忠誠が先行し、個が埋没してしまう日本の集団主義に反発／抵抗し、キリスト教に救いと解放を見出したという現実が、回心の重要な契機になっていたと思われるからである。現在も日本社会の現実はあまり変わっておらず、教会の中にも集団主義的傾向がある。しかしながらその一方で、集団から自らを切り離し孤立した生を生きているように見える者たちもいる。いずれの場合も、真に自立した個が愛をもって互いに仕え合う交わりには道な通しである。確かに日本の福音主義の諸教会も個人主義的傾向を免れていない。

そこで、個人主義の足かせをかけられた日本の教会は三位一体の神の愛の交わりを証しすることのできる、クリスチャン相互の交わりを十分に育てることが出来ずに来ている。教員同士が聖霊が生みだしてくださる交わりを形成することができず、教会は個々人の営みの集合体の域を出ることがなかなか出来ないのである。ここに、日本の教会が抱えている最も深刻な問題があるように思われる。

### (5) 三位一体の神と真の靈性

聖霊によって御父と御子の愛の交わりに与らしめられること、そして三位一体の神が愛をもって互いに仕え合っているように、私たちも神を父とし、キリストを長子とする神の家族に連なる兄弟姉妹として互いに仕え合うことの内に真の靈性があることを強調する Granz に心から同意したい。そのことの内に神のかたちの回復があり、そこで神の栄光が表されるとい

う指摘も正しい。

もし三位一体ということを正しく理解しなければ、私たちの靈性の正しい理解も生れて来ない。すなわち、もし三位一体の神を形式的には告白していても実質的に单一神論（例えば聖靈单一神論といったもの）や様態論に陥っているならば、あるいはまた、三位の神の相互のペリコーレーシスが十分に理解されず、単に三つなる位格の一体性の神秘だけが強調されているなら、交わりの内に生きる者として造られた私たちの本来の在り方が十分に認識されることはないであろう。あるいはまた、御父の御子、御靈の協同のみわざとしての創造、救済、聖化ということがふさわしく理解されなければ、私たちの靈性のモデルとなってくださった受肉の御子、私たちを三位一体の神の交わりに与らしめてくださる内住の聖靈が、現実のものとして認識されることも容易でなくなるであろう。

#### (6) 精神性とは何か、靈的であるとはいかなることか：靈性の神学に向けて

最後にこのテーマを論じる基本的な方法であるが、確かに Grenz のように The Anthropological to Christian Spirituality から出発することによって、神学の営みの文脈としての今日的状況を明らかにしたことは、間違っていない。しかしながら、その一方で、「靈性」という名詞や「靈的な」という形容詞で私たちが表現しているものが、聖書にどのように扱われているのか、もう少し丁寧に確認しておく必要があるのではないか。

実のところ「靈性」 spirituality に当る言葉は聖書に見出されない。また「靈的」と訳すことができる言葉は、新約聖書にはあっても旧約聖書には無い。新約聖書には形容詞 *pneumatikos* が 26 回見出され、その内 24 回までがパウロが使っているものである。その用例全体から分かることは、「靈的」ということは、神秘的／超越的な経験一般を表わすものではなく、「御靈の賜物」「靈的な知恵」「御靈に属するからだ」といったような、神の御靈の働きに関わること、聖靈の働きによってもたらされるものである。聖書的視点からすると「靈的」とか「靈性」といったことは、聖靈によって新生し、聖靈の内住をいただいた者の聖靈による歩みの全てについて語られ得ることであろう。特に「肉の人」に対比される「靈の人」とは、I コ

リント 3:1 やガラテヤ 6:1 にあるように、他者への関心、柔軟さ、うぬぼれや嫉妬、党派心の無いこと、教会全体への心配りといった特徴を有する者である。さらに見落とすことができないのは、キリスト者が闘わなければならない「惡靈」までもが「靈的なもの」 (ta pneumatika。ただし *tes ponierias* という語が付くが) と表現されていることである。

旧約聖書で主を信じる者の内に見られる「靈的な」姿勢、在り方を表現する最も典型的な言葉は、主を恐れること、主に対する恐れ (iruat adonai) であろう。「あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない……」（申命記 6:13）、「見よ。主の目は主を恐れる者に注がれる」（詩篇 33:18）、「主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ」（同 34:9）、「主を恐れることは知識の初めである」（箴言 1:7）、「万軍の主、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ」（イザヤ 8:13）といった教えや勧めが数多く見出される。とりわけ重要なのは、主の靈に満たされたメシアが、まさに主を恐れることを基本的な特徴としていることである：「その上に、主の靈がとどまる。それは知恵と悟りの靈、はかりごとと能力の靈、主を知る知識と主を恐れる靈である。この方は主を恐れることを喜び……」（イザヤ 11:2-3）。

「主を恐れる」ことの強調は新約聖書にも受け継がれている。成長する初代教会の姿が、「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖靈に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った」と表現されている（使徒 9:31）。パウロは「愛する者たち。……いっさいの靈肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。」と勧めている（II コリント 7:1）。

私たちは自らの置かれている時代の文脈において、神学を構築しなければならないとすれば、「靈性の神学」なるものを語ることが今求められていると言えよう。しかし、私たちはその探求を、「靈性」という語が用いられておらず、「靈的」という言葉も限定されていることの意味を考えることから始めなければならない。確かに神のかたちに造られたもの、神のよって

その鼻に「いのちの息を吹き込まれた」ものとして（創世記1:26-27, 2:7）人間の内には神に向う何かがあり、それを「靈性」と表現したくなるのは分からぬでもない。しかし、そのような「靈性」あるいは「宗教性」といったものは、神がお与えになった本来のものとは違ってしまった。その深刻な現実を最もよく言い表しているのはローマ1:21以下であろう。

「それゆえ、彼らは、神を知つてゐながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえつてその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言ひながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獸、はうもののかたちに似た物と代えてしまひました。」とある。人間は「神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えた」のである。

従つて、人の内にある靈的な志向は決して中立的なものではなく、聖靈によって再生されない限り真に「靈的なもの」となることはできないのである。ヨハネが「愛する者たち。靈だからといって、みな信じてはいけません。それらの靈が神からのものかどうかを、ためしなさい」と警告しているように（Iヨハネ4:1）、「靈的なもの」を即座によきものとして受け入れてしまうのではなく、それが聖靈から出たものであるのかどうかを注意深く見分けなければならない。ポスト近代の「靈的なもの」「靈性」に対する関心の高まりの中で、言葉は共通でも、いや共通のものを用いれば用いる程なおのこと、聖書の教える靈的なものと世俗の靈性の違いを見極めなければならない。そして、人の宗教性がそれ自体で眞の神につながるものではなく、聖靈による新生を必要としているものであることを告げることから始め、聖靈が生みだす「靈性」がどれ程、豊かなものであるかを明らかにすることをしなければならない。それが「靈性の神学」の構築において、私たちが辿るべき道筋である。

（聖書宣教会・教師会議長）